



昔語質屋  
 庫卷之四  
 初篇



~ 13  
 3394  
 4



門 13  
3394

照陽高見先生著

# 續皇朝戰畧篇

全五册

此書正編ノ由ニ行ル、日月ニ感ナリ而未ダ近世ノ戰畧ヲ記スニ及ブ故ニ先生新ニ續編ノ著アリ乃チ其載スル所ハ文化年間魯西亞ノ入寇ニ起リ尔来中國又ハ西東ノ戰ヒ近年佐賀台灣ノ諸役昨年朝鮮江華島ノ捷ニ至マデ大小ノ諸戰ヲ記シテ名將勇士ノ奇勲備畧洩ス所ナケレハ兵家必讀ノ書タルハ言ヲマダズ今日開明ノ化ノ由テ興ル所以ス者マタ戰ニ出レハ此書人々之ヲ閱セサル可ラス四方君子幸ニ顧リミ汝メテ其奇書タルヲ知リ玉ヘ

大阪書肆

前川文榮堂發兌

ちきまのあきあきの下の子孫の事都首之ついでを名義のついで

## 昔語 質屋庫 卷之四

東都

曲亭

馬

平將門 哀龍の製束乃下

さて目今も論じたり。七人の將門を。つとともつたがけに。妾御竊

小美女とてり。その蜂谷の動くりの。真の將門ありとあつて。されば。遠小

こを射し。しと。小説の藤六左近が。狂歌より出たり。後小の馬を

結ぶ。の。又一條の怪談を添く。將門の首級京師への。傳へて。棄られ。り

け。新。怨靈。その首級。小。あつて。なほ。枯。夜。み。光。を。を。ら。く。こ。か

軀。返。せ。頭。を。継。て。今。一。軍。せん。と。呼。び。け。く。人。を。怖。て。近。つ。の。の。は。

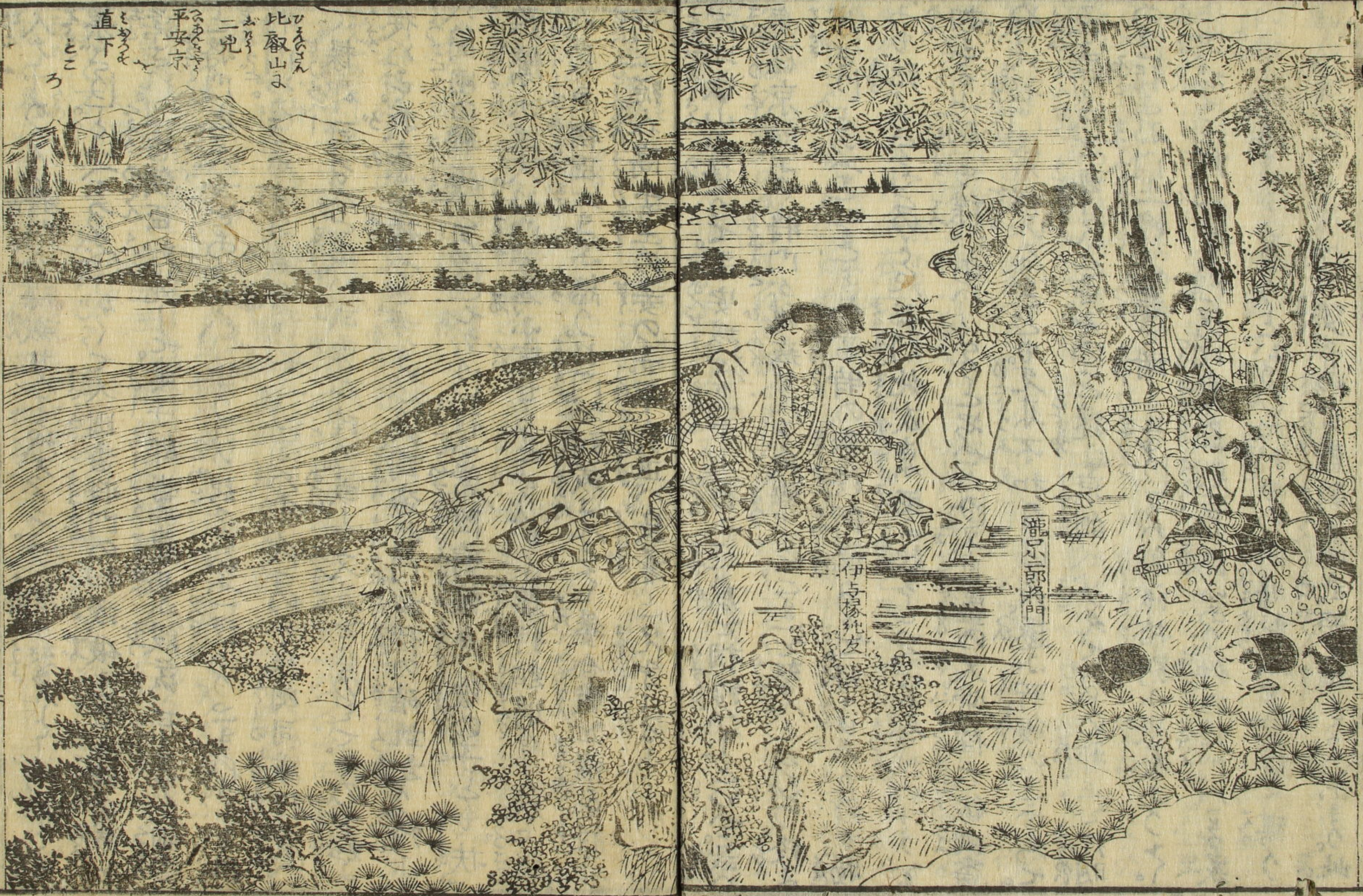
かく。て。あ。る。人。こ。を。と。え。く。將門。の。ま。う。を。う。り。ぞ。切。ら。れ。る。依。藤。太。か。

え。う。り。と。あ。く。と。詠。し。く。お。門。の。首。級。呵。と。う。ら。笑。ひ。か。て。目。を。開。て

死しつゝとつゝ。頭じりゝるまじりゝるの馬に乗て。己が家へ帰じとて  
 怪談で搜神記小も載しとまじと誰うゝことと實りのとせん件の狂歌  
 へ藤六といふの跡より保元平治物語小見えたり。その藤六の狂言  
 利口とて當時世ふきられればや。宇治拾遺物語卷三十一條の藤六  
 が歌を載し。あつゝのさびとてとてとて。こゝの人の家小入り。濁小  
 ありらるゝの死とてひらるゝ家の女の女小められるとは。藤六とせん  
 又仁和寺の藏書目録も。藤六傳といふのありは。あつゝの何の  
 世時の人ありとてまじとて。藤六の將門より後の人あり。只そのとを藤六  
 ちて人小膽多せらるゝ當時小説を記すの藤六が歌よりひらりて。蜂谷  
 の動りの死真の將門ありと。その改る母死じりゝるんごり怪談をば  
 仰りせしめんと。件の歌のさつゝへ田原を俵小うけて俵藤太といふ人小  
 米くまゝの藤六とて實小將門へ蜂谷より射られし事。切らしとるものあり。  
 まつゝ小實小お門へ米くまゝよりとてとてとて。歌をひらりて。世  
 俗の推量るれば。論じると不足は。為義判官ありとて。奈良法師ホ  
 小神木とぬらんとて。京師近くありぬと。笑えし。防とてめよと。仰  
 下され。宿所へも立ぬらんと。郎黨のつゝ。召喚して。粟子山へ死  
 向ひ。獲て追ふてり。時の人。戯笑歌小。奈良法師。粟子山とて。まじ  
 来て。物の具と剃ぞとて。藤六も。そのさつゝ。おほ。實小奈良法  
 師ホ。物の具と剃らし。し。あつゝ。栗子山といふと。けと。い。物乃  
 具とつけ。栗の皮をむるものあり。と。剃ぞとて。藤六も。今昔  
 物語の貞盛矢とて。つゝ。つゝ。つゝ。お門から。手の眼を。胃の熱や。夫  
 こと。射射。け。將門を。双の。猛將る。まじ。と。又。矢一筋。ふ。つゝ。て。

死しつゝとつゝ。頭じりゝるまじりゝるの馬に乗て。己が家へ帰じとて  
 怪談で搜神記小も載しとまじと誰うゝことと實りのとせん件の狂歌  
 へ藤六といふの跡より保元平治物語小見えたり。その藤六の狂言  
 利口とて當時世ふきられればや。宇治拾遺物語卷三十一條の藤六  
 が歌を載し。あつゝのさびとてとてとて。こゝの人の家小入り。濁小  
 ありらるゝの死とてひらるゝ家の女の女小められるとは。藤六とせん  
 又仁和寺の藏書目録も。藤六傳といふのありは。あつゝの何の  
 世時の人ありとてまじとて。藤六の將門より後の人あり。只そのとを藤六  
 ちて人小膽多せらるゝ當時小説を記すの藤六が歌よりひらりて。蜂谷  
 の動りの死真の將門ありと。その改る母死じりゝるんごり怪談をば  
 仰りせしめんと。件の歌のさつゝへ田原を俵小うけて俵藤太といふ人小  
 米くまゝの藤六とて實小將門へ蜂谷より射られし事。切らしとるものあり。  
 まつゝ小實小お門へ米くまゝよりとてとてとて。歌をひらりて。世  
 俗の推量るれば。論じると不足は。為義判官ありとて。奈良法師ホ  
 小神木とぬらんとて。京師近くありぬと。笑えし。防とてめよと。仰  
 下され。宿所へも立ぬらんと。郎黨のつゝ。召喚して。粟子山へ死  
 向ひ。獲て追ふてり。時の人。戯笑歌小。奈良法師。粟子山とて。まじ  
 来て。物の具と剃ぞとて。藤六も。そのさつゝ。おほ。實小奈良法  
 師ホ。物の具と剃らし。し。あつゝ。栗子山といふと。けと。い。物乃  
 具とつけ。栗の皮をむるものあり。と。剃ぞとて。藤六も。今昔  
 物語の貞盛矢とて。つゝ。つゝ。つゝ。お門から。手の眼を。胃の熱や。夫  
 こと。射射。け。將門を。双の。猛將る。まじ。と。又。矢一筋。ふ。つゝ。て。

馬より逆さす小流乃と秀郷をきりて首とつるとんえし又お門  
 記ふ新皇暗小神竊よ中て独虫尤の地小滅ぶとつりお門記ふ  
 由と死ハ流矢小命と流せりる也又今昔物語小純友又今昔首と京  
 小持の記しる右近馬場ありそのより成奏と洛中の貴賤の  
 甚多一翌日左衛門府生掃部在上といふ畫師を召て彼首と流  
 せんとおせども内裏へりらるべしふあふて写しそめせよと仰  
 下されり右近馬場小由死其首流写してなりり頭のくつらか  
 由かつらざりり以上在上の物のくつらと写すと殊小妙と流る画師之  
 云とんえし人の肖像とくつらとりの昔もありりかまお門  
 か首級の京への記しと死も親るりの堵の如くまごまごふ浮く  
 流とるしうけん推とつれ侍り又同々亦の第三第四條お門純  
 友比叡山小登りて平安城と直下し密小逆意と相語ひといふ或ハ  
 貞盛京師あり將門が謀叛せんといふ察しとこを怒るとつひつ終  
 果ざりといふことなり當時の巷談街説るを好るのありの物  
 小由記しるはとつらお門純友東西よ起るとつら合戦のやうと  
 按さる小聊中謀ありとつらとつら又貞盛の又常陸大掾國香  
 ぬしお門の叔父とることもえ来不和るりて遂小所領の上ふとて  
 互に干戈と動えんととつらその正速京師へ送えてその邪正を分明  
 ぬり行はる門上結して罪を謝しなり朝議格別小恩赦ありと  
 東へ流る上流とつら比貞盛朝臣ハ洛ふあり件の將門ハお家  
 の仇とるふとつらのとつらお門純友の武略と稱するのあり此



比叡山  
二兎  
平安京  
直下  
とこ

伊与揚純友

龍小三郎将門

良兼朝 八月 慶元年 六月 中旬 死 三年 二月 門滅亡

人々下めり。將門の謀叛せんを欲せりて。度々殺めんとしられども。  
 果ざりし。つらなるべし。かくて又國香將門の和議破まて。土浦の城を  
 落され。國香朝臣討死して。妻子郎黨東西に没落せしむ。國香  
 と將門と。又女とあり。つらなるべし。つらなるべし。つらなるべし。つらなるべし。  
 將門は下めり。叛逆の公あり。つらなるべし。つらなるべし。つらなるべし。つらなるべし。  
 て。椽郡司のんと。或は武勇小袴の。或は文才とあり。つらなるべし。つらなるべし。つらなるべし。つらなるべし。  
 従ひ。我意を振へ。つらなるべし。つらなるべし。つらなるべし。つらなるべし。つらなるべし。つらなるべし。つらなるべし。つらなるべし。  
 八咫國の騷擾とあり。つらなるべし。つらなるべし。つらなるべし。つらなるべし。つらなるべし。つらなるべし。つらなるべし。つらなるべし。  
 隆繁亦三人お門が為小害せり。つらなるべし。つらなるべし。つらなるべし。つらなるべし。つらなるべし。つらなるべし。つらなるべし。つらなるべし。  
 良兼朝臣大に怒り。お門を討滅せしむ。妻合戦を催し。つらなるべし。つらなるべし。つらなるべし。つらなるべし。つらなるべし。つらなるべし。つらなるべし。つらなるべし。  
 前上総公高皇王の妻の子。平良正の良兼と。つらなるべし。つらなるべし。つらなるべし。つらなるべし。つらなるべし。つらなるべし。つらなるべし。つらなるべし。

こを助け。叔侄頼小我小と。つらなるべし。つらなるべし。つらなるべし。つらなるべし。つらなるべし。つらなるべし。つらなるべし。つらなるべし。  
 一族の確執あり。謀叛と名あり。つらなるべし。つらなるべし。つらなるべし。つらなるべし。つらなるべし。つらなるべし。つらなるべし。つらなるべし。  
 へあり。つらなるべし。つらなるべし。つらなるべし。つらなるべし。つらなるべし。つらなるべし。つらなるべし。つらなるべし。つらなるべし。つらなるべし。つらなるべし。つらなるべし。つらなるべし。  
 文室好ま。つらなるべし。つらなるべし。つらなるべし。つらなるべし。つらなるべし。つらなるべし。つらなるべし。つらなるべし。つらなるべし。つらなるべし。つらなるべし。つらなるべし。つらなるべし。  
 兵に追せ。つらなるべし。つらなるべし。つらなるべし。つらなるべし。つらなるべし。つらなるべし。つらなるべし。つらなるべし。つらなるべし。つらなるべし。つらなるべし。つらなるべし。つらなるべし。  
 八年春二月。権守與世王。つらなるべし。つらなるべし。つらなるべし。つらなるべし。つらなるべし。つらなるべし。つらなるべし。つらなるべし。つらなるべし。つらなるべし。つらなるべし。つらなるべし。つらなるべし。  
 芝と。つらなるべし。つらなるべし。つらなるべし。つらなるべし。つらなるべし。つらなるべし。つらなるべし。つらなるべし。つらなるべし。つらなるべし。つらなるべし。つらなるべし。つらなるべし。つらなるべし。  
 徳ん為小武彦。つらなるべし。つらなるべし。つらなるべし。つらなるべし。つらなるべし。つらなるべし。つらなるべし。つらなるべし。つらなるべし。つらなるべし。つらなるべし。つらなるべし。つらなるべし。つらなるべし。

陣あり。故多く経基の営所を囲まへ。経基朝臣より舞ひく。  
 應て上洛し。事の越と奏し。ふくろて。お門又一層の罪を倍て謀叛の  
 一紙風同せん。とす。や東へ穿えし。兵世三由。牙の罪遁まがしと  
 びひて。頼みお門小謀叛をせめ。お小けは。將門由亦武勇をよみて。ふ  
 とめて。東國残りあり。勢ふ棄て。京師まで攻の海らんとし。  
 謀りて。こまのはお門記の趣あり。又神皇正統紀あり。平將門ハ執政  
 の家。ふつら。まろけ。が。使の宣旨を呈し。やけり。許し。の。の。けん。  
 憤りて。東國。下向して。謀叛を。と。り。ま。げ。伯父の常陸國の大塚  
 國香をせめ。く。國香自殺。ぬ。と。ま。ら。う。坂東を推る。ひり。下総國相  
 馬郡小居正と。と。て。都と名つけ。ま。げ。う。ら。平親王と稱し。官爵を  
 の。さ。ら。る。と。は。ふ。ら。て。天下發動。と。參。議。□。部。卿。愚。右。工。門。督。藤。原。忠

文朝臣を征東大將軍と。源経基藤原仲舒と副將軍と。い。く。  
 英つるさる。平貞盛藤原秀郷。ホ。紙。下。あ。て。將門を。の。け。て。の  
 首を。を。し。く。六。年。と。え。え。し。う。ま。つ。れ。も。將門記。小。由。と。は。文。路。前。後。ま。つ。ふ  
 を。経。し。り。と。え。え。し。う。ま。つ。れ。も。將門記。小。由。と。は。文。路。前。後。ま。つ。ふ  
 似。う。と。ま。の。只。世。よ。ひ。り。て。傳。る。ま。つ。ふ。記。さ。れ。ら。る。る。と。又。秀。郷。朝  
 臣。を。め。む。し。め。將門。小。と。せ。ば。や。と。ひ。て。下。総。へ。の。り。く。ふ。お。門。追。従  
 鹿。忽。ち。く。その。思。ふ。あ。ら。じ。け。ら。ぶ。應。て。下。野。ま。ま。ら。う。貞。盛。朝。臣。を。副  
 て。終。よ。大。功。を。し。て。たり。と。い。ま。と。お。つ。る。あ。れ。と。秀。郷。ハ。世。よ。ま。つ。れ  
 する。武。略。の。達。人。ふ。く。その。人。と。り。朝。敵。小。と。せ。と。も。あ。ら。じ。の。果。し。て  
 事。を。兩。端。ふ。謀。り。て。と。め。將門。小。と。せ。と。お。お。あ。ら。じ。の。後の。軍。功。の  
 た。の。り。から。ば。將門。ハ。さ。ら。ふ。東。八。州。を。掠。奪。し。て。や。を。獲。り。彩。皇。と

備上（上）下（下）慈（慈）の亭（亭）南（南）宮（宮）殿（殿）を造（造）宮（宮）へ平安城（平安城）小擬（小擬）橋（橋）をりて  
 京（京）の山崎（山崎）相馬郡（相馬郡）大井（大井）の津（津）と近江（近江）の大津（大津）と。左右大臣（左右大臣）納言（納言）参  
 後文武百官（文武百官）六辨（六辨）八史（八史）とてく（とてく）惣（惣）卜（卜）定め（定め）とてひさる（ひさる）曆日博士（曆日博士）を  
 闕（闕）りといふかたは畢竟（畢竟）狂人の所（所）為（為）小等（小等）。こまらのり（こまらのり）のり（のり）のり（のり）某（某）もいと  
 苦（苦）くく（く）らひ（らひ）と。このた秀郷（秀郷）下野（下野）小あり（小あり）。つてその為（為）俸（俸）と傳（傳）す  
 かま（かま）り（り）その為（為）俸（俸）と傳（傳）す（と傳す）らん（らん）ふ（ふ）。共（共）謀（謀）る（る）不足（不足）とてく（とてく）べし  
 共（共）謀（謀）る（る）不足（不足）とてく（とてく）べし（とてくべし）下慈（下慈）小赴（小赴）とてく（とてく）べし（とてくべし）何（何）う（う）ハ（ハ）せん（せん）か  
 將門（將門）いま謀（謀）叛（叛）のかつば新皇（新皇）と偽（偽）称（称）せざる（せざる）已（已）前（前）あり（あり）ん（ん）を（を）り（り）ん（ん）を（を）り（り）ん（ん）  
 かに亦（亦）彼（彼）負盛朝臣（負盛朝臣）の（の）あ（あ）く（く）山（山）中（中）小（小）躲（躲）ま（ま）く（く）。仇人（仇人）の降（降）と避（避）け密（密）小  
 為（為）憲（憲）秀（秀）郷（郷）小（小）謀（謀）令（令）を（を）。短兵（短兵）急（急）小（小）公（公）私（私）の剛敵（剛敵）を滅（滅）し（し）れば（れば）その功  
 少（少）とせとせと。その次（次）小（小）常陸（常陸）又（又）藤原（藤原）維（維）茂（茂）の息男（息男）為（為）憲朝  
 臣（臣）と下野（下野）押領使（押領使）藤原（藤原）秀（秀）郷（郷）朝臣（朝臣）の功（功）も又（又）大（大）なる（なる）。さ（さ）は（は）將門（將門）の  
 主（主）地（地）小（小）滅（滅）亡（亡）し（し）る（る）の忠文（忠文）忠舒（忠舒）経基（経基）ホ（ホ）の官軍（官軍）数（数）万人（万人）駿河（駿河）國（國）ナ（ナ）ク  
 是（是）よ（よ）け（け）は（は）將門（將門）小（小）属（属）従（従）ひ（ひ）る（る）鳥合（鳥合）の兵（兵）ホ（ホ）の（の）り（り）兵（兵）傳（傳）す（と）。さ（さ）く  
 驚（驚）と怖（怖）ま（ま）戎（戎）ハ（ハ）落（落）とせ（とせ）戎（戎）ハ（ハ）降（降）系（系）。残（残）ア（ア）と（と）る（る）兵（兵）ハ（ハ）僅（僅）千人（千人）足  
 ぶ（ぶ）る（る）り（り）小（小）け（け）は（は）將門（將門）勢（勢）ハ（ハ）究（究）り（り）て負盛秀郷（負盛秀郷）小（小）撃（撃）ま（ま）る（る）。さ（さ）ら（ら）ば（ば）忠  
 文（忠文）以下（以下）の大將（大將）と（と）づ（づ）ら（ら）朝敵（朝敵）と（と）戦（戦）と（と）い（い）ふ（ふ）も（も）その功（功）も（も）と（と）て（て）く（く）ら（ら）  
 也（也）。又（又）同（同）く（く）、（く）正（正）の第五條（第五條）六郎（六郎）公連（公連）が將門（將門）と（と）練（練）く（く）ね（ね）て死（死）し（し）と（と）い（い）ふ  
 一（一）月（月）五（五）日（日）と（と）い（い）ふ（ふ）良兼（良兼）椽源（椽源）護（護）并（并）又（又）平負盛（平負盛）公雅（公雅）公連（公連）秦清（秦清）文几  
 常陸（常陸）國（國）等（等）將門（將門）と（と）追捕（追捕）ま（ま）る（る）官府（官府）と（と）武藏（武藏）安房（安房）上（上）総（総）常陸（常陸）下（下）毛  
 野木（野木）の國（國）又（又）下（下）と（と）い（い）ふ（ふ）と（と）い（い）ふ（ふ）。か（か）は（は）公連（公連）ハ（ハ）將門（將門）討手（討手）の一人（一人）なり（なり）。

臣（臣）と下野（下野）押領使（押領使）藤原（藤原）秀（秀）郷（郷）朝臣（朝臣）の功（功）も又（又）大（大）なる（なる）。さ（さ）は（は）將門（將門）の  
 主（主）地（地）小（小）滅（滅）亡（亡）し（し）る（る）の忠文（忠文）忠舒（忠舒）経基（経基）ホ（ホ）の官軍（官軍）数（数）万人（万人）駿河（駿河）國（國）ナ（ナ）ク  
 是（是）よ（よ）け（け）は（は）將門（將門）小（小）属（属）従（従）ひ（ひ）る（る）鳥合（鳥合）の兵（兵）ホ（ホ）の（の）り（り）兵（兵）傳（傳）す（と）。さ（さ）く  
 驚（驚）と怖（怖）ま（ま）戎（戎）ハ（ハ）落（落）とせ（とせ）戎（戎）ハ（ハ）降（降）系（系）。残（残）ア（ア）と（と）る（る）兵（兵）ハ（ハ）僅（僅）千人（千人）足  
 ぶ（ぶ）る（る）り（り）小（小）け（け）は（は）將門（將門）勢（勢）ハ（ハ）究（究）り（り）て負盛秀郷（負盛秀郷）小（小）撃（撃）ま（ま）る（る）。さ（さ）ら（ら）ば（ば）忠  
 文（忠文）以下（以下）の大將（大將）と（と）づ（づ）ら（ら）朝敵（朝敵）と（と）戦（戦）と（と）い（い）ふ（ふ）も（も）その功（功）も（も）と（と）て（て）く（く）ら（ら）  
 也（也）。又（又）同（同）く（く）、（く）正（正）の第五條（第五條）六郎（六郎）公連（公連）が將門（將門）と（と）練（練）く（く）ね（ね）て死（死）し（し）と（と）い（い）ふ  
 一（一）月（月）五（五）日（日）と（と）い（い）ふ（ふ）良兼（良兼）椽源（椽源）護（護）并（并）又（又）平負盛（平負盛）公雅（公雅）公連（公連）秦清（秦清）文几  
 常陸（常陸）國（國）等（等）將門（將門）と（と）追捕（追捕）ま（ま）る（る）官府（官府）と（と）武藏（武藏）安房（安房）上（上）総（総）常陸（常陸）下（下）毛  
 野木（野木）の國（國）又（又）下（下）と（と）い（い）ふ（ふ）と（と）い（い）ふ（ふ）。か（か）は（は）公連（公連）ハ（ハ）將門（將門）討手（討手）の一人（一人）なり（なり）。



但天慶二年のころ内堅伊知負経といふ所の將門を諫めたる事あり。

まづれは將門の事と申ひむと却理を非ふ推て詰りしるが負経の古を巻

口を併て閑居とて將門記に見えしれがこの負経が正しく唱けて公

連がそのこととあるや。又阿の第六條忠文朝臣ひとり勸賞ふ

漏るるをうらむ憤り。擡つめたる指の爪の手甲へ徹て血を流し。死

して悪果とるりの事あり。例の小説忠文朝臣ハ征東大將

軍より。從自餘の輩と勲功の賞ふ漏るるとありとも。忠文ひとり

偏ぬるや。但奥州後三年の合戦の事。偏執の沙汰ふよつて勲功の

賞行はざるに。奥州後三年紀に將軍家四解をありてアスあり。武

衛家衛を諫殺とて負任宗任よと死する。私のちうらとあり。武

節刀とありし追討使官符とありたる國司の朝敵を討成する

勲功の賞行はざるは頼義朝臣の負任宗任を討ふにげむひする

頼信朝臣の平忠常を討滅しひする。功ありて賞するにあらざるを

この例あり。按ざる忠文朝臣憤死の事。依り出せし左衛門督

藤原誠信朝臣の事。依り出せし左衛門督

段。左衛門督との事。亞相を辱せし事。その事ありしを

られふ事。悪むとて三十八歳なりし事。ひさ。ざりし

あし。手とつて握りて。られし事。ひさ。ざりし

て物もあはざる事。ひさ。ざりし。七日とある事。ひさ。ざりし

み。ひさ。ざりし。七日とある事。ひさ。ざりし

み。ひさ。ざりし。七日とある事。ひさ。ざりし

み。ひさ。ざりし。七日とある事。ひさ。ざりし

み。ひさ。ざりし。七日とある事。ひさ。ざりし

位下右  
手併  
の第  
恒徳公  
の二男  
推口兼  
言止二  
位  
道信  
信  
恒徳公  
の二男  
推口兼  
言止二  
位  
道信  
信

實錄傳卷四

中將

共

誠信の

かあり

情強

上ごふぞとせし。云々とある。然假りて忠文のるふに假りてえしるる。左工門  
督誠信と右衛門督忠文と官爵名告も。その唱似々ひらり。これら  
むじの小説あるを軍記に之を裁らしむれば世俗大々忠文のるふこと  
多し。宇治の橋姫と。その怨灵合せしといふ怪談も。その人宇治に住  
のひよんがり。又お門追討の官軍ハ朝敵滅びぬとて。駿河  
國より。京へ入り。来りしる。あま物も。記し。されど。將門記よる  
と。此の官軍既。將門が。殺し。しる。と。て。す。と。い。ども。途。より。及。洛。せ。し  
あ。の。あ。ら。び。海。道。の。警。手。の。將。軍。刑。部。大。輔。藤。原。忠。舒。の。檄。下。給。
權。少。掾。平。公。連。軍。記。又。お。門。と。誅。す。の。て。押。領。使。と。し。て。四。月。八。日。の。て  
入。部。し。て。即。謀。叛。の。類。と。尋。察。す。その。内。賊。首。お。門。が。舍。第。七。八。人。或。ハ  
鬢。髪。と。剃。除。し。て。深。山。へ。入。り。或。ハ。妻。子。を。捐。棄。て。各。山。野。小。迷。し。り。  
このと。此。奥。世。王。ハ。上。孫。國。々。生。物。と。れ。將。門。が。兄。弟。と。云。ふ。云。々。氏。々。  
相。摸。國。々。到。て。官。軍。小。殺。害。せ。し。る。ふ。る。ん。ま。う。も。ら。の。忠。文。朝。臣。ハ。智  
勇。も。大。く。ふ。ん。あ。ら。ぶ。り。れ。あ。や。佐。々。三。郎。兵。衛。尉。盛。綱。法。師。三。念  
か。言。小。吾。々。天。慶。年。中。平。將。門。東。國。小。あ。い。て。叛。逆。を。企。し。と。死。宇。治。口  
部。卿。追。討。使。と。し。勝。と。慶。の。間。の。宣。下。有。べ。この。旨。と。て。宇。部  
箒。と。抛。て。坐。を。起。て。別。系。内。に。節。刀。と。給。の。後。歸。宅。不。及。び。直。り  
洛。外。小。赴。さ。ぬ。勇。士。の。志。と。と。ころ。こ。ま。と。め。て。善。と。は。と。東。鑑。に。見。え  
し。り。か。ま。ば。忠。文。の。官。軍。の。後。ま。し。と。と。候。ん。と。く。如。小。洋。軍。終。よ  
合。我。小。あ。ら。び。と。の。み。ぞ。我。の。鏡。ハ。信。ぎ。ふ。足。ら。ず。何。れ。の。り。悪。ら  
字。と。う。け。な。が。め。て。神。皇。正。統。犯。小。悪。右。衛。門。督。と。記。さ。し。り。あ。や。  
傳。写。の。の。信。頼。と。と。り。ら。く。と。る。又。宇。治。悪。左。府。と。と。ひ。と。と。ら。れ。り。

ころゆい。宇治小住けし。世巻て宇治の口部卿といひ。喜  
 と好く。殿御へ。二品式部卿重明親王醍醐天皇の皇子。ふらう。宇治よ  
 のもた。忠文。忠孝。とをひ。ひ。今昔物語第三十巻。見え  
 たり。又お門。お三の女児。尼と。りて。如義と法名。奥州惠日寺の  
 側小菴を。掃びて。寡居たり。有一日病。頓死。りける。小地。新井の  
 冥助。よ。て。蘇生。あ。り。世の人。地。新井と。渾名。り。年。十餘  
 あり。て。辻化。と。と。え。亨。釋書卷之十八。小見え。り。又お門の子。小平良門と  
 あり。の。根州。多田の城。を。攻。満仲朝臣と。撃。んと。却。源。二。綱。小  
 登。ま。り。る。は。物。ふ。り。の。究。め。る。小。説。あ。り。あ。り。つ。る。と。あ。り。あ。り。今  
 昔物語。小源。宛。と。平良文。と。常。武。藝。の。甲。乙。と。争。ひ。有。一。日。各  
 軍。と。の。廣。野。ふ。少。と。務。員。と。試。ふ。ぬ。馬。の。達。者。あ。り。る。

三。感。と。和。睦。と。り。り。被。宛。が。字。と。三。田。源。二。と。い。ひ。良。文  
 が。字。と。村。岡。五。郎。と。い。ひ。り。り。宛。と。綱。と。良。文。と。良。門。等。て。良  
 門。が。多。田。攻。と。い。ふ。源。經。の。出。陣。と。大。系。圖。と。り。推。と。れ。お。門。の。子  
 小。良。門。と。い。ふ。の。は。良。文。の。高。望。王。の。季。子。あ。り。從。五。位。下。孫。也。府  
 將。軍。と。り。村。岡。五。郎。と。稱。と。便。お。門。が。叔。父。と。將。門。の。小。良。門。と。い。ふ  
 の。の。出。家。と。生。涯。行。ひ。と。す。と。あ。り。り。何。や。り。あ。り。ん。と。い。ひ。か  
 書。名。を。忘。れ。と。れ。ば。頭。め。の。搜。り。お。り。ご。ま。由。是。否。の。志。ら。び。又  
 平。貞。盛。ぬ。へ。お。び。ご。ま。猛。と。り。凄。い。人。あ。り。丹。波。守。と。り。在。任。の。時  
 惠。澄。と。り。へ。京。よ。り。医。師。と。迎。下。り。と。見。せ。け。ま。お。見。干。と。い。ひ。業  
 ら。と。り。治。と。り。見。干。と。い。ひ。妊。婦。の。腹。と。り。男。兒。あ。り。る。が  
 それ。と。業。小。加。と。調。劑。と。り。る。貞。盛。の。子。の。左。衛。門。尉。維。衡。と

貞盛丹  
 被  
 海軍  
 八掛  
 〇〇〇

任團へ  
携られ  
左門尉  
へ既ま  
さるる  
の意を  
丹波へ  
迎へ  
まらば

呼べてこの茶を求むとせよとて身の為ありあらん。汝が妻  
懐任する。その腹を裂て。且よとて。維衛を驚愕さ  
る。から。けり。ぬ。と。て。醫師許あて。びる。あ。つ。ふ  
え。と。泣。け。且。ば。醫。師。ま。と。し。難。の。じ。ち。あ。ら。ぶ。と。く。  
館。の。蛇。と。茶。の。め。と。め。せ。め。つ。と。同。が。負。盛。と。改。ま。し。の  
左。門。尉。が。妻。の。懐。妊。さ。と。を。け。て。置。う。と。答。え。医。師。問。ゆ  
あ。い。ど。そ。れ。の。何。あ。つ。せん。と。亂。れ。某。あ。る。べ。と。求。め。る。と。い。ひ。  
は。炊。女。の。懐。妊。と。く。と。月。あ。る。と。列。出。さ。し。て。腹。と。さ。れて。みる。女。子  
る。の。け。し。ば。又。外。へ。孕。婦。と。求。て。某。の。と。う。て。病。と。愈。し。う。と。て  
医。師。あ。物。事。と。し。て。後。子。の。左。衛。門。尉。維。衛。と。呼。び。て。口。を。瘞。す。  
見。干。き。愈。し。う。よ。と。彼。医。師。が。入。ふ。つ。ら。と。疑。ひ。は。京。へ。歸。り。の。は。る  
と。埋。伏。し。て。害。せ。よ。と。い。ひ。け。し。ば。維。衛。一。族。も。及。ぶ。と。集。引。て。皆。よ  
医。師。も。その。状。告。を。せ。り。判。官。代。と。馬。不。宗。と。医。師。ハ。あ。る  
ゆ。く。む。維。衛。ハ。山。蔭。ふ。と。ま。の。と。盗。賊。の。ど。く。り。を。り。判。官。代。と  
一。箭。よ。射。殺。し。て。館。に。ぬ。り。て。射。ち。し。る。と。疾。り。の。ま。に。医。師。が。不  
妻。と。子。と。救。ひ。つ。る。小。答。と。と。する。小。医。師。ハ。生。く。京。に。あ。り。し。判。官  
代。が。殺。え。る。と。其。負。盛。被。て。さ。は。い。つ。ふ。と。同。小。維。衛。一。え。て。  
医。師。ハ。歩。み。て。従。者。の。中。より。ゆ。と。ま。り。馬。上。小。答。を。う。し。て。教。を  
主。と。と。あ。ま。り。て。射。ち。し。ゆ。い。と。と。守。領。げ。ふ。と。と。あ。ら。し。と。ひ  
て。その。ち。の。強。て。い。ち。と。ま。の。負。盛。が。一。の。郎。黨。諸。忠。か。し。め  
の。か。さ。り。と。ま。つ。死。て。か。う。る。傳。へ。る。が。り。と。今。昔。物。話。第。六  
ふ。ん。え。る。の。と。も。ぞ。の。ま。ね。ど。既。よ。い。つ。り。の。を。指。し。て。

たふ書ぶめれば更ふるねとも誣がじり果て如此  
 むも貞盛朝臣の人情も漏る罪少人あり是をさひ彼  
 とさひふ小そのむまの猛く鬼狼小異るるまざるそもねね門小  
 家らべとん宣るる邦七代の孫清盛入道小至くその暴究り  
 子孫遂小朝敵の罪名を負ぬ又彼医師のつろふこええららん  
 のに仁術とこそ又母を殺してその赤子と菜ふせよと教ふるこれ  
 かにさむ又貞盛ぬよあらざると憎べさめめさう。こまきく  
 用ひる將門紀といふものハ美徳三年正月九日小大智坊小於て  
 拜書とて奥書のり。堀河院の印守小當たり。現ふ此ころ書綴り  
 るものとは不くと。御教書るへどの小もええさべて漢文小擬て  
 書ぶまといと拙けまども究めて古書へ。さふの婦物のもあふ  
 四なりて抄録せり。このまじり

将門の古衣のまじりもの。よたどつとつひあて死ぶあとい入て  
 物まを箇まるとは。款とるの身方とるも。頸牙の世よあるむま  
 とそ死しての後ハ何らあまよ。されば人ハむじの人小あまを拜の後  
 遺物とまじりましく託と傳へ。託とまは。実りまする。虚言  
 おしるるハ物の本の常るまじり実るも。虚言も又あしうとねど。  
 よく史を続実録と聞て。そそ草紙物語をえらんあつりてままる  
 一とまるから。虚実とてふ小辨へ易し。書とてつて理をささる  
 求るとるたハ托る山小述んがど。善を傳へ悪を傳へあることありと。  
 又の死とをありととるも。皆是書の中小あるまじり勉てその悪を懲り  
 その善を勉んとあらま。まれば人もゆるねべきとせめてその罪あらは  
 ふかるむびとるまじりと求めて古人と非るまはのむ。よく史あり

仁徳三年正月九日

十一

かとのバツミ。鼻うらうらうとぞ感づりぬ。

第八 肩間尺が觸髅盃

浩知ふ海ぶら唐木の匣小高紐うけて肩間尺が觸髅盃と写れ  
るが古衣の迹小居うらば衆皆ひびくこととえて世俗ふとく  
あられる肩間尺が觸髅りて。他は盃るふと奇し。その紐をせく  
解下。とふ小備るるのひとけりて。蓋とる徑小忽地跳上  
ゆりのひちり入も他は木と彫て底みじしる盃へ鞘絵と金うく  
泥するれば。さる呆果て笑と忍び匣書つけ小觸髅とあるふ。てを  
匣と盃とぞ合せりりのる。ど。觸髅盃とりの人の頭顱小漆  
て酒器とせりのふ木彫るれば。区くべ。これいふ。と研まば盃も又  
歎息。何なるの各ある。某も徒てまら彼肩間尺といふ猛者へ唐

山楚國の劔匠干将莫邪が子ぞいひる。楚王の妃肥満て夏の日の熱  
と苦とせよ。歳の柱を抱さう。身を冷めひく。終ふその気と感づりや。  
孕て穢の丸といと。おもゆる小産のひね。是究上の濁秩るれば。楚王これと  
りて干将小劔と造じのひら。干将命とけり。その妻莫邪小合能  
う。凡三年や。雄雌の劔と作りし。て陽の劔と干将と名つけ。陰  
の劔と莫邪と唱へ。こころから進せん。いと惜く。ひく。陽の劔と深  
く。陰の一口とたてまつる。小楚王との成まる。この逢と怒りて。立地干将  
と殺せり。ある小干将が遺腹の男兒あり。彼もや成長ふる。びて身の天  
高く。脊力つ。肩の間の廣れと。一尺小あり。は。肩間尺とぞ喚はける。  
かくて有一母莫邪小父の正と問ふ。母は啼泣。子小對ひ。もん。身が  
又。楚王の為小劔と作り。果る。王との逢と責。又

一のぶこ劍の口。一のぶを怒りて家もろくを殺しひきかひのぼと豫く  
 まれば。口がまきまき。吾儕小密語り。これらも。殺されし戸と。出て南山  
 のぞき。まばねる上。生り。劍の背。小あり。腹の。子。成長。後。小問。が。如。け。答。を。こ  
 宜せしと。告。ふ。け。ま。ば。眉。間。尺。大。さ。ふ。驚。き。又。が。非。命。の。死。と。悲。き。ま。ま。を。南。山。小  
 野。こ。つ。終。り。件。の。劍。と。獲。て。楚。王。と。相。懸。ん。と。ま。かり。復。ふ。楚。王。の。夢。了。  
 一個の。少年。の。眉。間。の。廣。さ。と。二。尺。あ。ま。り。あ。る。が。王。と。又。の。仇。を。奪。入。と。ま  
 と。め。ん。と。う。ろ。そ。ま。よ。れ。と。憎。ま。る。眉。間。尺。が。頭。と。ま。り。て。金。一。千。金。を  
 賜。べ。し。と。て。園。中。小。募。り。く。眉。間。尺。脱。去。て。山。中。小。呻。吟。を。ま。り。て。客。を。ま  
 どり。ま。ふ。あ。か。く。その。う。ら。歎。く。故。と。問。ふ。父。の。仇。人。と。報。ひ。ら。ひ。ら。う。の。頭。は  
 と。物。語。ま。ば。客。は。び。て。感激。し。これ。を。小。楚。王。頻。ふ。ち。身。が。頭。と。干。將。の。劍。を  
 求。む。と。ま。と。獲。て。献。ら。る。恩。賞。限。ら。る。と。ま。り。り。の。二。物。を。ま。り。小。借。さ。

一のぶ。ち。身。が。為。小。仇。と。復。ぶ。と。一。の。眉。間。尺。飲。び。く。あ。て。ま。り。う。ら。劍。つ。  
 頭。と。劍。と。両。手。小。提。生。が。如。く。ま。り。け。客。を。ま。り。て。涙。と。流。し。れ。ん  
 牙。小。肩。小。と。言。と。放。て。誓。し。一。の。身。の。撲。地。と。仰。ま。り。か。く。て。客。を。以。て  
 楚。王。小。ま。ま。ま。王。飲。び。て。これ。を。ま。り。眼。と。睜。し。齒。と。切。り。の。身。生。ふ。異。あ。る。と  
 客。王。小。や。い。や。う。これ。の。勇士。の。み。り。黄。爛。一。の。と。一。の。王。と。ま。り。ま。り。か。ひ。て。  
 大。る。獲。小。湯。と。ま。り。こ。ま。と。煮。り。て。三。日。三。夜。又。及。ぶ。と。も。あ。な。ま。り。も。ま  
 う。の。び。王。と。ま。り。怪。ま。る。ま。り。う。ら。獲。の。母。小。い。ち。て。ま。り。眼。と。ま。り。亦。と。客。の  
 背。小。あ。り。て。干。將。の。劍。と。引。拔。王。の。以。て。う。ら。誘。せ。ば。獲。の中。へ。破。と。入。る。客。劍  
 と。ま。り。の。母。と。ま。り。う。ら。も。劍。を。ね。て。三。の。首。獲。の中。に。あ。り。う。ら。も。小。爛。し。つ。  
 何。れ。と。ま。り。も。口。が。け。ま。り。楚。王。の。臣。小。三。の。以。て。一。つ。あ。ぞ。葬。り。ぬ。今。も。汝。南  
 の。北。の。宜。春。縣。の。界。あ。る。三。王。墓。と。ま。り。う。ら。と。ま。り。う。漢。土。の。書

于久將  
か久  
三頭  
を煮  
と心

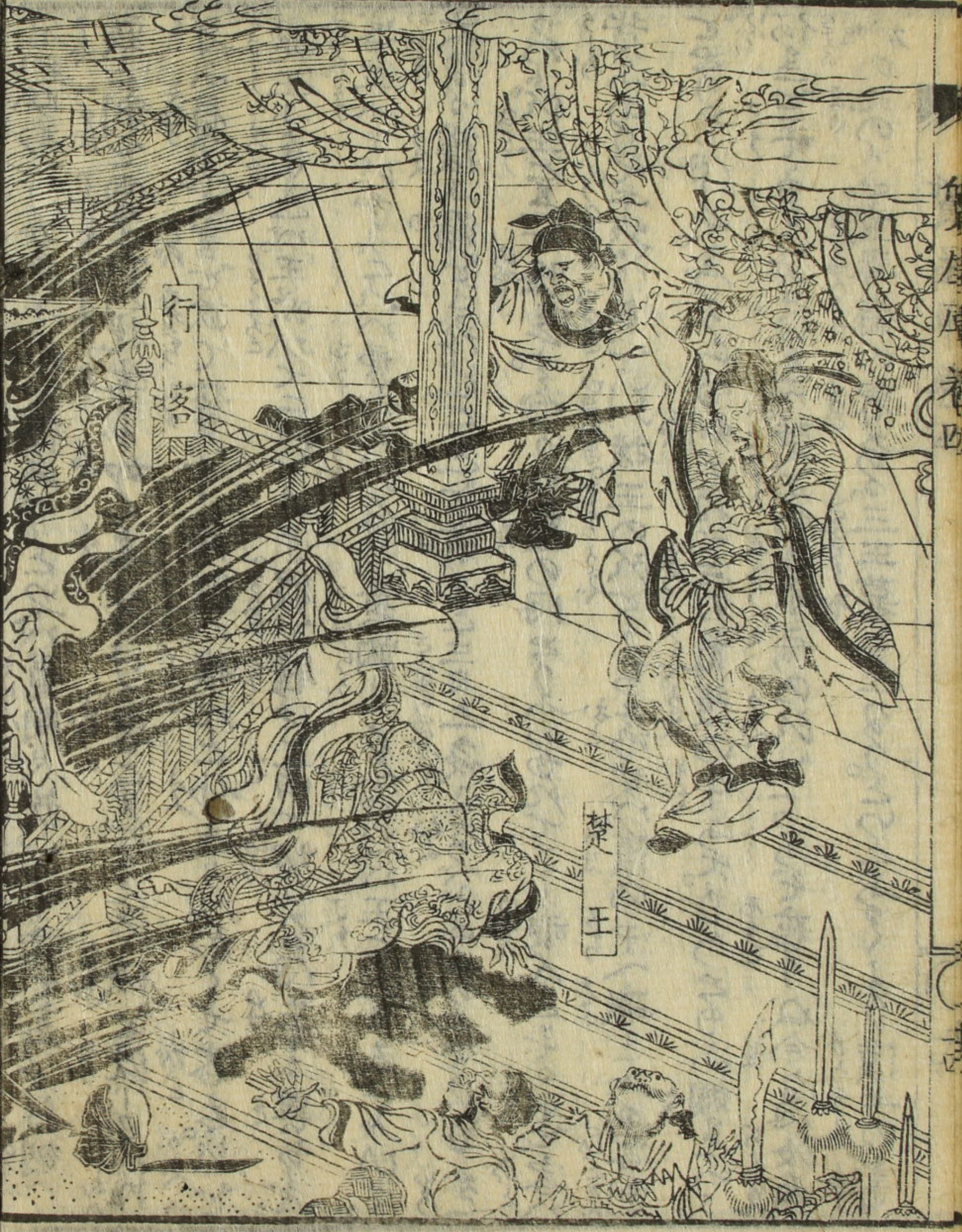
新編軍記



赤千尺

十五

新編軍記



行客

梵王



ちも見えええと云ふ。夢のうら。これハ盃のうら。これハ解客の伴。伴して物の言悪  
 と辨ぶ。さ。か。る。け。ま。は。心。に。此。觸。體。盃。の。名。を。負。せ。れ。春。の。物。の。屠  
 蘇。白。散。う。上。古。の。梅。花。酒。端。午。の。葛。蒲。酒。重。陽。の。菊。花。酒。う。ん。と。ハ  
 香。と。顛。こ。う。と。も。あり。祝。の。席。へ。面。出。る。う。ね。い。と。朽。と。く。と。云。え。え。を  
 先生。の。名。を。名。つ。け。祝。の。あ。れ。う。成。明。白。説。の。し。く。眉。間。入。と。い。ふ。名。を。除  
 と。觸。體。盃。の。杯。を。削。つ。て。め。ぞ。は。席。へ。折。入。入。う。て。め。は。じ。と。う。ら。芝。お  
 つ。う。口。説。ハ。見。基。先生。う。ら。京。改。お。ん。が。述。懐。理。り。こ。こ。の。鞆。繪。を  
 附。る。ふ。う。つ。て。眉。間。尺。の。名。を。負。し。底。圓。に。て。深。け。ま。ハ。觸。體。盃。の。喝。一  
 ろ。ん。世。俗。鞆。繪。の。故。実。と。云。ふ。或。ハ。眉。間。尺。ホ。三。人。の。改。獲。の。中。で。幾。ハ  
 象。の。う。ら。と。い。ふ。昔。の。俗。説。と。云。う。る。生。好。事。が。か。の。ご。う。小。教。風。宗  
 と。う。の。せ。る。の。ど。し。又。猜。と。る。小。原。の。盃。鞆。繪。と。つ。け。る。も。ち。の。浪。の。紋。と。違。ハ

如。く。水。の。う。ら。う。形。と。さ。う。え。巴。字。と。さ。り。と。訓。と。異。俗。説。を。名。ハ。曲。水  
 小。觴。と。流。と。と。い。ふ。扱。り。の。あ。ま。ハ。鞆。繪。と。ハ。画。に。と。ら。ん。と。云。ふ。ハ。も。も。  
 る。昔。の。夫。鞆。繪。ハ。眉。間。尺。ホ。美。の。以。ち。も。あ。ら。バ。又。巴。水。の。あ。ら。バ。鞆。ハ。古。訓  
 由。伎。又。古。の。俗。言。と。廢。武。多。と。う。應。神。天。皇。の。産。草。と。云。ハ。六。腕。の  
 上。又。生。う。ら。故。の。名。を。稱。て。善。田。天。皇。と。さ。り。上。古。の。倭。鞆。と。早。て。廢。武。多  
 と。い。ふ。と。日。本。紀。に。え。え。う。ら。の。鞆。と。い。ふ。の。ハ。ひ。射。る。の。の。臂。へ。か。う。我。具。と  
 ゆ。れ。と。い。ひ。ひ。ん。と。い。ひ。ひ。の。と。い。ふ。の。の。喝。ハ。異。る。れ。ど。も。その。物。ハ。も。ほ。む。し。神  
 社。へ。大。刀。獲。ら。う。箭。鏡。玉。鞆。馬。の。の。派。進。と。る。ふ。或。ハ。本。と。り。て。造。り。石。を  
 り。て。造。り。又。略。く。その。形。を。画。に。て。も。ま。あ。ら。じ。と。れ。バ。鞆。の。繪。と。い。ふ。の。字。を  
 約。て。鞆。繪。と。い。う。今。う。ら。馬。と。画。と。そ。神。前。に。掛。る。紙。繪。と。い。ふ。が。い。し。  
 の。繪。馬。也。真。の。馬。と。奪。約。と。う。た。り。の。の。の。形。を。画。し。て。と。ま。う。う。と。う。

繪するの号ハ出ル。カミバ靴繪由神へそまると起るものと云ふ。一靴繪ニ靴繪るんどのの妻少小従人のモ亦同今演らまると眉間尺がりの晋の干宝が搜神記のちびた。ちんちんも搜神記は楚王の妃乃。鐵の丸を産けり。この亦干宝が子の名を赤といひて眉間尺と唱ふ。この方の軍記は赤がうらむ。搜神記は眉間の廣一尺との色。女く眉間尺と名つけし。さて彼搜神記十一の西漢の趙曄が呉越春秋と此被撮合して一條の物語といふ。この呉越春秋といふものも當時の小説なれど。古きものなれば虚言ありとまづつ。由文記の常あも引り。吾が今搜神記は干宝が子の赤が眉間一尺と云ふ。世ハかの呉越春秋小伍子胥が眉間一尺とある。呉越春秋の十一の赤十五張は。呉王僚の状の傳るるをのちむ。身丈一丈。腰十。眉間一尺。云々と云ふ。かれが眉間尺と云ふ。伍子胥といふ。干宝莫邪が雄雌の劍を似し。この同書二小段は騎射の切のま。干宝は。干宝下將は請て名劍二枚を渡らむ。干宝は呉人なり。歐冶子と師と同一と俱ふ。劍をつくる。これより先越の國二枚を奉獻し。六國の金と。干宝と。故とて劍匠と亦二枚を似し。干宝といひ。二を莫邪といふ。莫邪の干將が妻なり。かくて干將劍を似し。五山の鐵精六合の金英と采り。天は候ひ地は伺ひ。陰陽光を向ふ。百神臨視。まとも。天は降ら。金鐵の精納む。と論流る。干宝の由と云ふ。かしのどくある。干宝筒月より。遂は莫邪がよふ。遂て夫妻偃は冶爐の中へ。程は干將が妻髪を削れ。童女童男三百人。と橐を鼓。炭を。大婦合體して。陰陽の叙成。干宝の陽を匿く。その陰を献け。國の室叙と。魯の使季孫。干宝の堂叙大夫と。干宝と季孫。

繪するの号ハ出ル。カミバ靴繪由神へそまると起るものと云ふ。一靴繪ニ靴繪るんどのの妻少小従人のモ亦同今演らまると眉間尺がりの晋の干宝が搜神記のちびた。ちんちんも搜神記は楚王の妃乃。鐵の丸を産けり。この亦干宝が子の名を赤といひて眉間尺と唱ふ。この方の軍記は赤がうらむ。搜神記は眉間の廣一尺との色。女く眉間尺と名つけし。さて彼搜神記十一の西漢の趙曄が呉越春秋と此被撮合して一條の物語といふ。この呉越春秋といふものも當時の小説なれど。古きものなれば虚言ありとまづつ。由文記の常あも引り。吾が今搜神記は干宝が子の赤が眉間一尺と云ふ。世ハかの呉越春秋小伍子胥が眉間一尺とある。呉越春秋の十一の赤十五張は。呉王僚の状の傳るるをのちむ。身丈一丈。腰十。眉間一尺。云々と云ふ。かれが眉間尺と云ふ。伍子胥といふ。干宝莫邪が雄雌の劍を似し。この同書二小段は騎射の切のま。干宝は。干宝下將は請て名劍二枚を渡らむ。干宝は呉人なり。歐冶子と師と同一と俱ふ。劍をつくる。これより先越の國二枚を奉獻し。六國の金と。干宝と。故とて劍匠と亦二枚を似し。干宝といひ。二を莫邪といふ。莫邪の干將が妻なり。かくて干將劍を似し。五山の鐵精六合の金英と采り。天は候ひ地は伺ひ。陰陽光を向ふ。百神臨視。まとも。天は降ら。金鐵の精納む。と論流る。干宝の由と云ふ。かしのどくある。干宝筒月より。遂は莫邪がよふ。遂て夫妻偃は冶爐の中へ。程は干將が妻髪を削れ。童女童男三百人。と橐を鼓。炭を。大婦合體して。陰陽の叙成。干宝の陽を匿く。その陰を献け。國の室叙と。魯の使季孫。干宝の堂叙大夫と。干宝と季孫。

ちつり。季孫劔を振てる。小錫の中缺る。と黍禾の比。歎息して慙う  
 納め。この劔の奥。天下の宝あり。今宝劔のひを死する。呉の霸王と  
 べ。此祥の情。多き缺ると。そのの衣。よせん。又遠くは。これの劔と好むと  
 ども。受がじとく。受ててきぬ。鬪又國中の金狗狗は呉の刀の各と又曲るひと。と假りの小  
 仰て。よく釣を假りの。の。を賞する。ふ百金をめて。其との。時。は。釣者  
 利と貪む。が為ふ。その子二人と叙。血豊て。遂は二狗をつら。は。これを。吳王よ  
 献す。て賞金を。求む。鬪園の。の。つら。の。の。汝ひ。つら  
 賞と。おの。つら。と。は。作釣者。答て。某が。狗の。會る。な。よ。子。ども。と。叙  
 血豊て。終は。二狗をつら。ぬ。か。き。九常。ふ。異と。の。王。を。て。て。ま。つら  
 と。ども。が。狗の。甚。多。く。既。は。ひ。つら。ふ。藏。め。た。れ。と。た。か。と。と。人。が  
 その。の。の。鞍。の。狗。を。對。ひ。て。ふ。の。の。子。ども。の。名。を。び。つ。吳。鳴。扈。誓。ひ

何如ある。ぞ。出り。と。呼。め。ぬ。西の。狗。蹴り。出。又。胸。を。著。つら  
 吳王。鬪。園。を。と。て。且。怪。且。嘆。と。か。く。百。金。を。と。と。り。つら  
第一卷より  
 叙。と。と。は。こ。を。搜。神。記。ふ。假。借。を。吳。王。と。楚。王。と。三。月。と。三。年。と。魯  
 の。身。孫。が。劔。を。相。し。て。弔。の中。黍。禾。と。り。缺。る。衣。よ。遠。く。ら。は。吳。乃  
 亡。ん。と。い。ひ。と。さ。く。楚。王。の。干。將。の。劍。の。故。を。比。を。喪。ふ。又。他。狗。者。か  
 子。を。叙。血。ぬ。り。て。賞。金。を。求。め。と。の。を。假。て。干。將。が。子。の。ま。づ。ら。か。後。  
 劔。と。共。ふ。客。の。托。せ。と。の。假。り。え。又。客。が。命。を。損。ぐ。干。將。が。子。の。為。ふ  
 楚。王。と。叙。世。と。假。り。の。專。諸。が。と。を。假。り。と。こ。も。又。吳。越。春。秋。一。卷。ふ。伍  
 子。胥。が。楚。國。より。脱。て。吳。國。へ。入。り。比。号。又。專。諸。と。呼。び。し。る。勇。力。を。双。の  
 俠。客。あり。位。子。胥。と。是。は。相。結。と。り。公。子。光。鬪。園。を。汲。引。し。彼。專。諸。を

糧し。そのら公子光が王僚とせらるる交魚の中ふ劍をかき納ま  
 専備とて王僚を刺せしとあるを嫁りし。又客がなるも赤  
 為よ命を將しとせばハ蘆中の人を擬しるるは。伍子胥が楚を逃て呉に  
 入時追兵背よ迫しども津よ舟は時ハ蘆の中より一葉を漕りて子胥と  
 渡し又餉をゆく食せし。伍子胥ハ叮嚀し再生の恩と欲びばえ  
 じかこの志もして。漏らしみそと。ハ芦中の人喜ぶ。され人子背  
 とも。これとみるもの。バ身これと疑ひる。只面より死て疑ひるら  
 まあふ。このひもの。忍地入水へ死し。と亦是呉賦春秋よんえし。我  
 國の仁俠するもの。かる教。まじと。假つて客のものとせ。欽赤眉。かめ  
 結の全體を推し死ハ伍子胥が楚國へ攻入りて楚の平王の墓を覆き屍  
 と谷て入の仇を報ひ。史記よ。とめる。既と假りて干おか子の仇を報  
 る。あま。又楚王の干將の刃を獲て。と。首と夜あ。そのつら  
 変。と。假りハ呂氏春秋卷の十一至忠篇。小赤眉の滑王が怒て文  
 執と着る。と三日三夜あ。そのま。と。の。嫁りし。呂覽。

齊王即齊王の子。痛と疾。人を宋國よりつきて。文執と迎む。文執至  
 て王の疾を視む。太子ふま。王の疾ハ必こ。あ。と。王  
 の疾。已。必。と。叙。の。と。太子。の。文執。答。て。王の  
 怒。疆。う。ら。ん。ば。その。疾。治。さ。る。と。王。と。怒。り。さ。る。と。死。れ。ん。  
 と。の。太子。と。と。文執。と。拜。む。苟。も。王。の。疾。已。ん。あ。臣。母。と。あ。死。を  
 の。て。王。ふ。争。ふ。て。必。と。と。救。む。ハ。先生。患。ひ。の。と。の。と。文。執。  
 息。以。て。死。を。り。て。王。の。為。小。療。治。せ。ら。ん。と。来。り。し。太子。と。その  
 期。を。定。め。し。か。て。王。の。名。と。び。よ。る。と。到。り。し。王。既。小。怒。る。と。酷。し。

ちやうやくと文執事まの進り。あつれども病牀よ登るふ屨をも解どく。  
 王の衣を履汚しつその疾を伺が王まどく怒り。よよ言どいひく叱  
 退んごまふ文執事る退る。あつれども王の疾頓よ已めた。あつるふ怒酷し  
 かなよ左右よ命て生るが文執事を哀ふ。しれたのへで太子と王の后と  
 息よ争ひしめく。まを救んとしよども聴ごど。遂よ昂とめて生るが。  
 文執事とぞ哀ふらる。かてこれと襲と三日三夜ふく顔ま変ふごそのと死  
 文執事と擡て滅よこれと死えとるのふらる。ごど覆しを陰陽の気と後さ  
 とのひらび王まらりら覆とじて文執事遂よ死しうとりの。まを捜神記。  
 楚王干将が子の刃を煮る。二百三夜みく顔ま変ふごと仰らる。亦彼宜  
 春縣の鬼ふ三王墓と唱る古墳のふ因とて三の刃もひ世せらるん。  
 こまらるる。虚言よとれらる。いふくの小説の。あつれども父母の。又在邦

中禁の小説ハ唐山の小説を仰らる。あつれども世俗。覽る。と博ら  
 ざるの。その虚言る。とまらる。出知の。とまらる。婦幼ハ。まを。と  
 その虚言とまらる。いふ小説を仰らる。容易か。らる。いふ。と。親人  
 又難。又和漢虚実暗合の。とあり。日本紀。安康紀。眉輪王。又の仇  
 と稱。と天皇と弑。なる。雄略紀。眉輪王逃。して。圓大臣の宅。ふら。天  
 皇。使と遣。く。まを。求。め。大臣。と。まら。その女。韓媛と。葛城の宅。七  
 區と献。ア。眉輪王と。黒彦皇子の罪と。贖。んと。清。う。せ。ども。天皇。徳。に。  
 火を縦。て。その宅を。燔。し。の。大臣。と。黒彦皇子。眉輪王と。三人。俱。は。燔  
 死。する。時。よ。坂。合。部。連。贄。宿。禰。皇子の。屍。を。抱。て。燔。ま。ぬ。の。舍。人。亦。燒。る。亦  
 と。取。取。る。骨。を。擇。と。け。ま。ま。ま。の。棺。ふ。盛。て。合。葬。し。新。漢。擬。本  
 南。よ。ま。ら。と。え。え。ら。眉。間。尺。と。眉。輪。王。と。その。青。相。似。ら。又。眉。間。尺。と。楚

擬本の  
の擬

上ノ...

二二

王客の以煮爛とく分別志とに在り楚國の臣下三の以て宜春縣の鬼  
小合葬とて三王墓と唱ふるとの干室が小説と眉輪王と思彦皇子圓大  
臣と共に燔死させり。骨を擇りて在り。誓宿祿が舍人亦合葬とて  
新漢擬本の南ふきとて日本紀の執と粗相似とて。天地の間物とて  
對ふとてとて。かまは輓絵と水の文ありとて。悞曲水と鶴を流と  
とて。ある小因する生物と又輓絵へ眉間尺亦三人の以て象りしること  
さひ悞て融腫盃と名つけしる白物と亦一對あり。今こそあま真の眼  
かこらえまふ遇り。よろらぬ名とて除く。まは。まらぬとて。盃ハ飲ひ  
つ。舊の匣もぞり小ける。

第九

橋遠勢活命の一行物

亦その迹へ推ひしる。書画一張の慈幅ハ二八むりの尼君の黒主乃  
衣ふといひ。窶まて由卑一かぬ殊とぬり。骨像小姑の  
跡とて富貴化人合。貧賤親戚離と題せし。こころの當時三  
の。その一人と世よ名たる。橋朝臣逸勢が。一行物とあらはる。そのとて  
古画の尼君ハ。さひおせれる。眉うち頻め。こころの彼活命人逸勢が女  
の。妙沖を侍らし。こころの又年老て。さへも伴健岑が。謀殺の  
る。小望せられて。東路へ流されぬ。配所ハ。ゆるゆる。旅おむる。く  
る。の。よ。こ。その罪ふあらはれば。終に大赦の時ふあり。白骨及洛の  
朝思小澤ハ。刺位を贈とて。小傀儡の謡曲ハ。けり。の。あ。ぬ。悪人  
小書綴り。伴の強宗と申らん。名も。あ。ぬ。叛逆人の副浄は。つひ  
く。婦。幼ハ。お。り。て。精逸勢ハ。大悪人。と。憎。ま。る。こ。の。よ。う。と。を  
説。あ。ら。ば。生。世の寛枉。死。の。後。の。証言。小。又。其。の。心。む。る。心。

板築の驛

妙沖尼

父の

屍と



稿(か)を(か)き(か)り

妙沖尼

苦くおぼさる。既ふたうを證文あり。文徳実録卷之十一。嘉祥  
 三年。五月壬辰。流人稿朝臣逸勢。正五位下。追贈。詔。ともむ。  
 遠江國下りのひて。本郷ふ海。葬らひらる。抑逸勢。右中辨  
 従四位下。入居の子。性。とる。放。て。細節。と。拘。て。尤。て。隸。書。と。  
 妙。あり。た。さん。が。宮。門。の。榜。額。ふ。た。人。の。手。跡。見。在。せ。り。桓。武。の。お。へ。た。  
 延。暦。の。季。遣。唐。使。小。隨。て。唐。朝。小。到。り。て。唐。の。中。又。人。と。言。を。稱。と。稿  
 秀。才。と。い。ひ。し。る。ん。が。て。歸。り。其。の。日。致。官。と。歴。事。一。が。年。老。羸。病。と。  
 と。り。て。閑。居。と。仕。し。そ。ま。う。た。か。り。程。と。承。和。九。年。連。ふ。伴。健。岑。が。謀  
 反。の。上。と。海。と。ま。て。掠。擄。ま。し。る。服。ど。う。と。そ。の。死。と。滅。ら。し。し。伊。豆。國。配。流  
 せ。ら。る。と。い。ふ。逸。勢。が。配。所。と。赴。く。と。た。只。一。女。あり。悲。泣。て。又。と。暴。ひ。歩  
 下。り。て。従。へ。ば。官。兵。監。送。者。と。言。と。び。り。て。従。ふ。と。と。詳。と。な。ら。む。又。見。た。る。

遠くゆきつるに晝の止て夜にわたる潜す小徒入程よ逸勢ハ遠江の故  
 板築縣に到行つ。こゝに逆縁小舟ありたり。女児ハ天よ叫びつ地  
 小振轉て悲めども救へばもあつらん。おと驛下小葬りて喪前ノ序を  
 掃ひ屍と守りて遂よ去る。落髪して尼とあり。妙沖とある名告ける  
 されバ亡人の為小誓言念小雲時中懈らば。嗟とる暮々ヤを苦行ん  
 常小あつれば路人もこまが為小洞衣襟を濡しぬかてぬ。葬まこと  
 詔あふるびて女僧ハ父が屍と負て晴す小ぬ京せ。公時の人感嘆に  
 稱て孝女と呼びる。又同書ノ卷の五の第十二張小仁壽五年。  
 五月甲寅正五位下橘朝臣遠勢小從四位下と加贈一のふす。我  
 我しう。うまふ正史ふえおとて國史ハ俗稱あれが実りの。ささ  
 で糸竹の。よろこふひひ艶曲と。こもり。こもりの。為小教馬しは

り。凡物語と能まる小善人と悪人ありて。類也。悪人と善人不能り。え  
 び。三三以勸め。悪と懲一人情と演理系と正とを野史と。真の小説  
 と。唱と笑え。う小悪人多。ぬら又と悪人といふ。朽と。推量  
 あまといひうけ。うら酸鼻のふぞ。さみのろとも小目と拭ひか。笑  
 遠勢ぬ。ハ学問あり。手迹あり。唐山ハ名と。さあ。いとも  
 愛した文入る。一旦罪と。ぬら。子後小罪を。う。位  
 人贈りのもの。さ。さ。作。考。行。神。憐。の。ふ。あ。と。書  
 恩恵せのふるん。り。り。べ。さ。りの。子。り。け。か。る。孝。女。の。あり。と。も  
 ち。妙。沖。尼。と。い。ふ。名。と。ま。ら。今。ま。あ。て。織。る。純。中。ま。よ。これ。ら。の。條。を  
 草紙の。と。人。書。中。さ。め。せ。世。の。少。女。子。小。孝。行。と。勸。が。書。解。り。の。本  
 意。な。る。と。こ。の。鬼。俣。の。強。曲。あ。の。名。の。猛。く。は。あ。と。さ。言。入。あ。と。あ



丑淨し。その名の優小はらふや。うらぬ人でも正生へおまわつて分る  
るらん。えんば左天辨希世のぞた。菅家左近のころのんども。かづらひ  
し人あつたはど。まわりのあせのよろらげく。震死まひひく。佐人  
の部へ入るまで。昔は悪名を講ひたれど。あつ人ぞまわりのあせの悪花  
じつりのつらぬ。むすひ我まひねと。さる町噂小悪名を六驛へ  
人の言の察す。花岡ぬ牙申春まよふ。さうしてまひつらまひれ。世  
でも俗とも恨む。とて回應つたり。昔衣牙の幅廣さ。尼女女か  
孝の徳丁を有かくけし。



昔語寶屋庫卷之四終

